

2019 年 1 月 8 日 A グループ 冠木

山家悠紀夫『景気とは何だろうか』岩波新書 2005 年

終章 暮らしの視点から景気を見る

問題提起

「その言葉の意味からすると、『暮らしは良くななくても景気はよくなる』『景気が良くなっても暮らしは必ずしも良くならない』という現実があっても何ら不思議ではないのかもしれない」(P196・L5) とあるが、なぜ景気が良くなっても暮らしが良くならないのか。

選んだ理由

重要なことは、景気だけでなく国民の暮らしをも良くすることだと感じ、その妨げになる原因を考えることが大切だと思ったから。

B グループ

政府の目標や見通しが景気を「よくする」止まりであり、好景気時でも所得の増加や雇用の安定など家計への還元が達成されなかったのだ。

C グループ

景気が良くなっても、賃金は下がり続けて、正規雇用者は忙しくなり、長時間労働が増え、残業をしたのに割増賃金を支払われなくてサービス残業を強いられ所得が増えず、自営業も減少し、暮らしが良くならない。

D グループ

将来不安があるなかで、企業は景気が良くなっても人件費削減などを重視するようになり、その結果、景気の上昇が家計の改善とつながりにくくなった。現代において景気上昇と国民の暮らしは別問題になりつつある。

A グループ

政府による経済見通しが甘く、景気が良くなっても、賃金や正規雇用の就職口の減少、自営業の衰退、世帯間の所得格差の拡大、将来不安の問題など、暮らしに関することが解決されないため。